多賀城市文化財調査報告書第105集

山　王　遺　跡

― 第87次発掘調査報告書 ―

平 成 23 年 3 月

多 賀 城 市 教 育 委 員 会

序　　文

古代陸奥国府が置かれた多賀城の南面一帯には、東西1.7㎞、南北0.9㎞の範囲に方格地割りが施され、整然とした都市空間が形成されていました。メインストリートとなる東西大路沿いには国司クラスの邸宅が立ち並び、多くの人々が行き来している様子が目に浮かびます。山王遺跡は、この東西大路が遺跡のほぼ中央を貫いており、これまでの調査によって「国守館」として特別史跡に追加指定された千刈田地区や、庭園風の遺構が発見された多賀前地区など、地割り内部の様相を解明する上で重要な発見が相次いでいる遺跡であります。

さて、今回報告いたします山王遺跡第87次調査は、仙台湾高規格幹線道路の仙塩道路部分に予定されていた、仮称多賀城インターチェンジ建設地内での確認調査であります。予定地内の北西部約750㎡を対象として遺構の分布状況の把握に努めた結果、古代の竪穴住居跡や区画溝跡などが発見されました。周辺地区と比べると遺構の密度は低いものの、方格地割り内の実態を知る貴重な成果を得ることができました。この報告書が、市民をはじめ多くの方に広く活用され、埋蔵文化財に対する関心を深める一助になれば幸いです。

最後になりましたが、現地調査から報告書作成に至るまで御理解と御協力をいただきました東日本高速道路株式会社東北支社、宮城県土木部道路課及び関係各位に対し、心より感謝申し上げます。

平成23年３月

多賀城市教育委員会

教育長　菊　地　昭　吾

例　　言

1　本書は、平成22年度に実施した第87次調査の成果をまとめたものである。

2　遺構の名称は、各遺跡とも第１次調査からの連続番号である。

3　測量法の改正により、平成14年４月１日から経緯度の基準は、日本測地系に代わり世界測地系に従うこととなったが、本書では過去の調査区との整合性を図るため、従来の国土座標「平面直角座標系Ｘ」を用いている。

4　挿図中の高さは標高値を示している。

5　土色は『新版標準土色帖』（小山・竹原：1996）を参考にした。

6　本書に係る執筆・編集は、武田健市が行った。

7　調査に関する諸記録及び出土遺物はすべて多賀城市教育委員会が保管している。

凡　　例

1　本書で使用した遺構の種類を示すアルファベット記号は以下のとおりである。

　　ＳＩ：竪穴住居　ＳＤ：溝　ＳＸ：性格不明遺構

2　奈良・平安時代の土器の分類記号は『市川橋遺跡―城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書Ⅱ』に従った。

3　瓦の分類は「多賀城跡　政庁跡　図録編」（宮城県多賀城跡調査研究所　1980）、「多賀城跡　政庁跡本文編」（宮城県多賀城跡調査研究所　1982）の分類基準に従った。

4　本文中の「灰白色火山灰」の年代については、伐採年代が907年とされた秋田県払田柵跡外郭線Ｃ期存続中に降灰し、承平４年(934)閏正月15日に焼失した陸奥国分寺七重塔の焼土層に覆われていることから、907～934年の間とする考えと（宮城県多賀城跡調査研究所『宮城県多賀城跡調査研究所年報1997』1998)、『扶桑略記』延喜15年(915)７月13日条にある「出羽国言上雨灰高二寸諸郷桑枯損之由」の記事に結びつけ915年とする考えがある（町田洋「火山灰とテフラ」『日本第四紀地図』1987、阿子島功・壇原徹「東北地方、10C頃の降下火山灰について」『中川久夫教授退官記念地質学論文集』1991)。当センターでは考古学的な見解を重視し、前者の年代観に従っている。

調 査 要 項

1	調 査 主 体	多賀城市教育委員会	教　育　長	菊地昭吾
2	調 査 担 当	多賀城市埋蔵文化財調査センター	所　　長	加藤佳保
3	調査担当者	多賀城市埋蔵文化財調査センター	副　主　幹	武田健市
			発掘調査員	四家礼乃　畠山未津留

4　調査協力者　宮城県土木部道路課、東日本高速道路株式会社

5　調査従事者　浅野　弘美、浅野　寛智、輿　清志、齋藤冨男、坂口千洋、佐々木奈美、鈴木幸夫、鈴木　実、高橋純平、千葉美恵子、早坂秀一、松田仁昭、和田敦比呂

6　整理従事者　相澤留美子、小倉　怜、神林利江、松橋純子

No.	調査次数	所在地	調査期間	調査面積	調査担当者
1	第87次	南宮字八幡地内	平成22年11月25日から 平成23年１月20日まで	750㎡	武田健市 四家礼乃、畠山未津留

目　　次

序　文

例　言

凡　例

調査要項

Ⅰ　遺跡の地理的・歴史的環境 …… 1

Ⅱ　調査に至る経緯と経過 …… 3

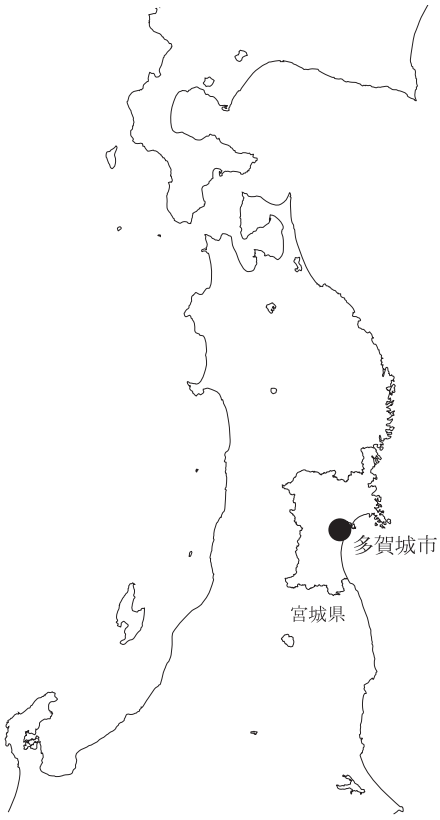
Ⅲ　調査成果 …… 4

Ⅳ　ま と め …… 7

Ⅰ　遺跡の地理的・歴史的環境

１．地理的環境

多賀城市は、宮城県の中央やや北東寄りに位置し、南西側で仙台市、北西側で利府町、北東側で塩竈市、南東側で七ヶ浜町と接している。市内の地形についてみると、中央部を北西から南東方向に貫流する砂押川を境に、東側の丘陵部と西側の沖積地に二分される。丘陵部は松島・塩釜方面から延びる標高40～70ｍの低丘陵であり、南西に向かって枝状に派生している。沖積地と接する付近では谷状の地形を形成しており、緩やかではあるが起伏に富んだ様相を見せている。沖積地は仙台平野の北東端部に相当する。仙台市岩切方面から多賀城跡にかけての県道泉塩釜線沿いには標高５～６ｍの微高地が延びており、その北側は利府町に跨る低湿地が広がっている。一方、南側には大小の微高地や低湿地、旧河道などが分布しており、海岸に近い地域には浜堤列も確認できる。このうち、県道沿いに確認できる微高地は七北田川や砂押川の沖積作用によって形成された自然堤防と考えられており、本遺跡をはじめ新田・市川橋遺跡など市内でも大規模な遺跡が隣接して所在している。



第１図　多賀城市の位置

本遺跡は、七北田川の東岸約１㎞付近から砂押川西岸にかけての微高地及び低湿地上に立地している。東西約２㎞、南北約１㎞の範囲に広がっており、市内でも最大規模の面積を有している。遺跡内の地形について詳細にみると、中央県道沿いにある東西方向の微高地は、遺跡西端付近が6.5m前後と最も高く、南東側に向かって緩やかに傾斜している。南東部は標高3.5m程の低湿地であり、砂押川西岸に至る範囲が現在の水田地帯となっている。また、遺跡の南側には東西方向に延びる旧七北田川の流路があり、終戦直後に撮影された航空写真にその痕跡を確認することができる。一方、近年の発掘調査により、本遺跡の旧地形についての資料も増えつつある。古墳時代においては、北東部の八幡地区や西側の掃下し地区から南側の多賀前地区にかけて水田跡が発見されており、遺跡の南半部に限ってみれば、新田遺跡で発見されたものも含めると大規模な生産域が広がっていた可能性がある。これら水田域の多くは奈良時代にはすでに乾燥した地層で覆われており、かつては低湿地と考えられていた多賀前地区においても９・10世紀にかけて遺構が密集していることが確認されている。このことから、七北田川と砂押川に挟まれた本遺跡周辺は、微地形とともに土地利用のあり方も変化していることが明らかとなってきている。

２．歴史的環境

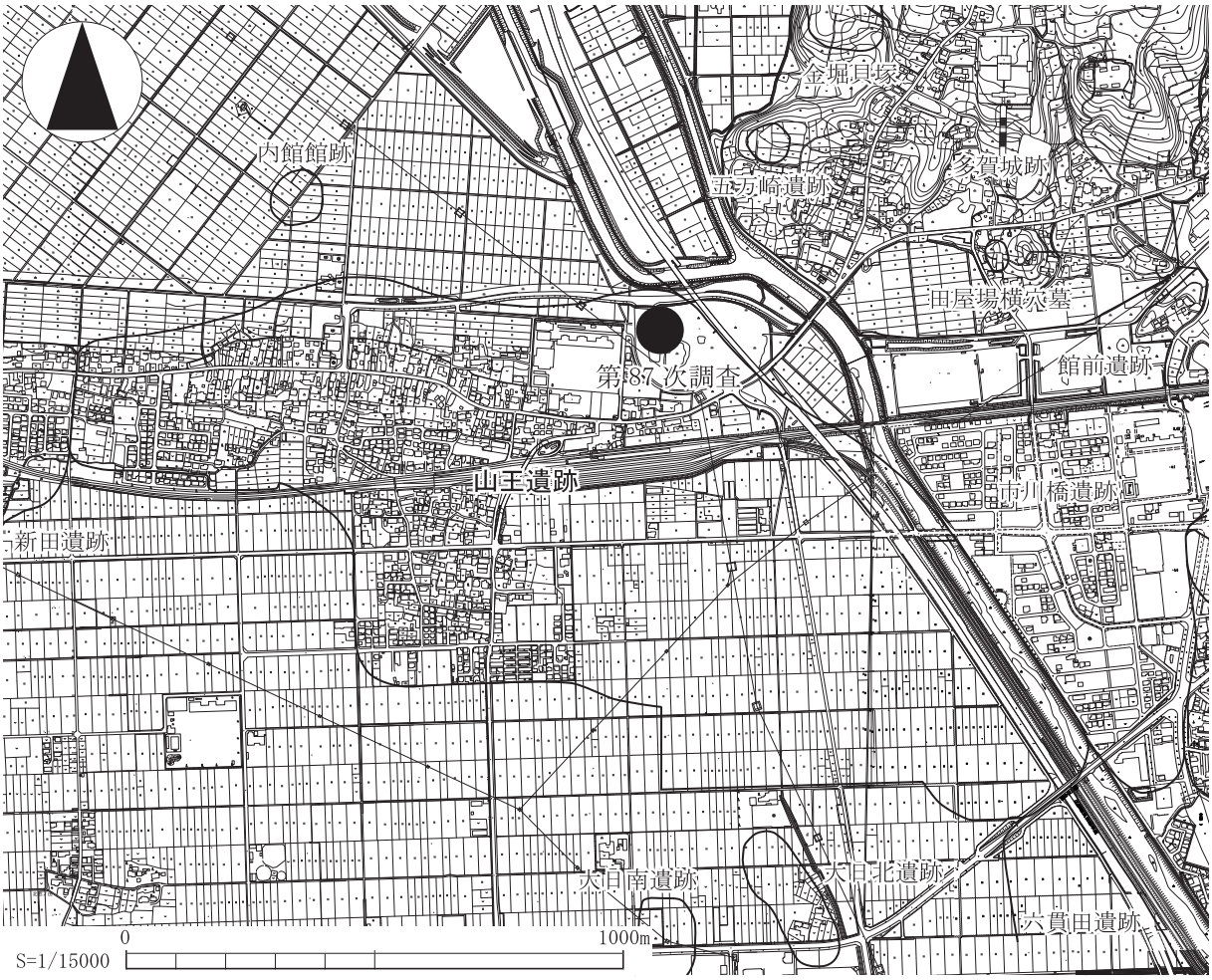
本遺跡では、これまで市教育委員会や宮城県教育庁文化財保護課が数多くの調査を実施しており、弥生時代から近世にかけての遺構・遺物を発見している。ここでは各時代の代表的な成果を概観しておきたい。

弥生時代：北東部の八幡地区では中期以前の水田跡や中期の遺物包含層が発見されているが、集落跡は

未発見である。

古墳時代：前期では、中央部の南宮字町地区や毛上地区で竪穴住居跡、北東部の八幡地区や西側の掃下し地区及び南側の多賀前地区にかけて水田跡が発見されている。遺跡南側に展開する広大な水田域に対して、発見された竪穴住居跡は町地区の数軒のみであるものの、集落の一画が徐々に明らかにされつつある。中期では、微高地上に多数の竪穴住居跡が発見され、集落が形成されていたことが明らかとなっている。八幡地区では前半段階にはすでに鍛冶工房が出現し、遺物包含層からは多量の土師器のほか、鹿角製刀装具や琴柱形角製品、卜骨など特殊な遺物も多く出土している。東町浦地区では大規模な区画溝が発見され、西町浦地区では続縄文土器や黒曜石製の石器が出土するなど、地域の拠点的な集落であった可能性が考えられる。後期になると、八幡地区で100軒を超す竪穴住居跡が発見されている。重複するものが多数認められることから、集落が長期間にわたって営まれていたと考えられている。また、集落内を流れていた河川跡からは、多量の土器のほかに柄香炉、卜骨、斎串が出土しており、本地区周辺における仏教文化の受容や卜骨を用いた祭祀の変遷過程を知る上で貴重な資料といえる。

奈良・平安時代：奈良時代では、八幡地区で掘立柱建物跡や竪穴住居跡、溝跡が発見されている。しかし、遺構の密度としては、後述する平安時代に比べれば極めて散在的であり、未だこの時期の様相については不明な点が多い。なお、発見された溝跡からは漆紙文書や漆付着土器が多数出土しており、周辺に漆工房の存在が想定されている。平安時代になると城外の方格地割りが完成し、地方都市としての景観を見



第２図　山王遺跡と周辺の遺跡

せるようになる。西端部を除く本遺跡内のほとんどがこの地割りに組み込まれ、各地区で道路跡、掘立柱建物跡、井戸跡などが多数発見されている。これまでの成果によると、外郭南辺築地に平行する東西大路沿いには「国守館」をはじめとする国司クラスの邸宅が立ち並び、それより１区画離れた場所には下級役人の住まいが設けられるなど、区画内で土地の選定が行われていたことが明らかになっている。また、東町浦地区の土壙から多数の灯明皿が出土しており、この周辺で「万燈会」のような仏教行事が行われていたと推測される。

中世：八幡・伏石・中山王地区では、大規模な溝に区画された屋敷跡が発見されている。このうち八幡・伏石地区では、12～13世紀頃の「古い屋敷跡」と15～16世紀頃の「新しい屋敷跡」が発見されており、「新しい屋敷跡」については、新田遺跡と同様な屋敷群の一部であると考えられている。これら屋敷の居住者については、本遺跡一帯が留守氏の支配する「高用名」及び「南宮庄」に比定されている地域であることから、それに関連した武士層であったと推測される。

近世：塩竈街道を踏襲しているとされる県道泉塩釜線に面した西町浦・町・伊勢各地区で、近世の掘立柱建物跡や区画溝跡、井戸跡などが発見されている。このうち西町浦地区では、かつて酒造業を営み塩竈一の宮の「御神酒屋」であった賀川家の敷地内を調査している。大規模な東西・南北の堀跡と井戸跡が発見され、堀跡からは陶磁器や土器・木製品・石製品が多量に出土している。また、町・伊勢地区でも堀で区画された南北に長い屋敷跡が発見され、多数の掘立柱建物跡や井戸跡が確認されている。町・伊勢地区周辺は、17世紀初頭に伊達家家臣成田氏とその足軽が移住した地とされており、街道沿いには上述したような屋敷が立ち並んでいたと考えられる。

Ⅱ　調査に至る経緯と経過

本調査は、仙台湾高規格幹線道路の一部である仙塩道路に建設が予定されている、仮称多賀城インターチェンジ（多賀城ＩＣ）建設地内での確認調査である。

多賀城ＩＣについては、平成１～７年度にわたって発掘調査を実施しているが、対象となる約49,000㎡のうち、約27,000㎡の調査を終了したに過ぎず、未だＩＣ建設が凍結された状態となっている。本線部分についても、当初計画は４車線であったものの、山王遺跡内については発掘調査が終了した17,500㎡分の暫定２車線が開通したのみである。近年、仙塩道路の交通量は１日２万台にも達し、さらに仙台北部中核工業団地造成に伴う交通量の増加が見込まれることや、多賀城ＩＣ完成が本市の産業及び観光面で非常に重要な役割を担うことが明らかであることから、本市においても早急な４車線化の実現とこれに伴うインターチェンジの建設が強く求められていた。

平成22年４月、これまでの多賀城ＩＣ建設に係る発掘調査の推移や今後の調査についての見通し等について、事業担当課である本市建設部都市計画課と打合せを行う。その結果、国土交通省東北地方整備局仙台河川国道事務所に対してより具体的な調査費用及び調査期間を提示するため、未調査部分を対象とした遺構確認調査の実施を求められた。一方、平成22年度については、年間の調査スケジュールがおよそ確定していたことから、多賀城ＩＣ未調査部分すべてを対象とする確認調査を実施することは不可能であった。そのため、当該年度に調査可能な期間及び面積について試算した結果、２ヶ月間で800㎡の確認調査を行

うのが限度であると推測した。これを基に確認調査に係る費用を積算し都市計画課に提出したところ、概ね承諾を得た。その後、宮城県土木部道路課より県道泉塩釜線から多賀城ＩＣまでのアクセス道路部分の調査について費用負担の協力が得られることとなったことから、一部調査範囲の変更を行う。

一方、本件については未だ具体的な建設計画が示されていないことから、宮城県文化財保護課と今回の発掘調査に関する手続きについて協議を重ねた結果、文化財保護法第99条に記されている「地方公共団体による発掘の施行」が適用されるとの回答を得た。

11月19日、宮城県と多賀城市の間で委託契約書が締結されたのを受け、作業員や重機の手配など、本格的な発掘調査の準備に取りかかった。11月25日から対象範囲の環境整備を行い、26日に器材の搬入を開始した。11月30日から重機を導入し、アクセス道路部分（Ｉ区）の表土除去を行った。12月１日から作業員を投入し、Ｉ区南半部から遺構検出作業を開始した。その結果、にぶい黄橙色砂質土（Ⅲ層）上面でＳＩ1485竪穴住居跡、ＳＤ1530・1531区画溝などを発見した（註）。ＳＩ1529では既に床面の一部が露出していたことから、本地区内での遺構の残存状況は良くないと判断された。検出した遺構の年代を探るため、ＳＤ1530・1531について一部埋土の掘り下げを行ったが、出土遺物が少なく詳細な年代を明らかにすることはできなかった。Ｉ区の調査が概ね終了した12月15日から、北東側に東西方向の調査区（Ⅱ区）を設定した。西半部から遺構検出作業を開始し、中央部で大規模なＳＤ1534溝跡や、東端部で灰白色火山灰が自然堆積するＳＤ1537溝跡等を確認した。平成23年１月７日から実測図作成のための基準点を調査区内に移動し、８日にかけて平面図を作成した。12・13日に標高地の記入及び平面図の確認作業などを行うとともに、器材撤収の準備を開始する。14日に調査器材の搬出、18～20日に重機による調査区の埋め戻しを行い、本件に関する現地確認調査の一切を終了した。

Ⅲ　調 査 成 果

本地区周辺におけるこれまでの調査成果によれば、現代の表土または旧水田耕作土を除去すると直ちに古墳時代中期から近世にかけての遺構面が現れ、さらにこの下層に古墳時代前期や弥生時代の遺構面が存在することが明らかとなっている。

今回の調査区では、Ｉ区南半部に60㎝前後の盛土（Ｉ１層）と、約20㎝の旧水田耕作土（Ｉ２層）が認められた。中央部ではＩ２層下に黒褐色粘質土（Ⅱ層）が薄く堆積しているが、ほとんどは遺構検出面であるにぶい黄橙色砂質土（Ⅲ層）となっている。一方、Ｉ区中央部から北半部にかけてはＩ１層の堆積が徐々に薄くなり、北端部及びⅡ区では遺構検出面を覆うのはＩ２層のみである。

なお、Ⅱ章でも述べたとおり、今回の調査は上面での遺構の分布状況を確認することが目的であったことから、下層の状況については確認していない。

以下、今回発見した遺構の概要について記載する。

註：ＳＤ1531については、当初西側隣接地で平成５年度に発見したＳＸ5600西６道路跡の東側溝ＳＤ5601の可能性も考えられたが、位置関係が一致しないことや、遺構の規模や埋土がＳＤ1530と共通していることから判断して、鉤形に曲がる一連の区画溝跡であると判断した。

⑴ 発見した遺構と遺物

ＳＩ1529竪穴住居跡（第４・６・７図）

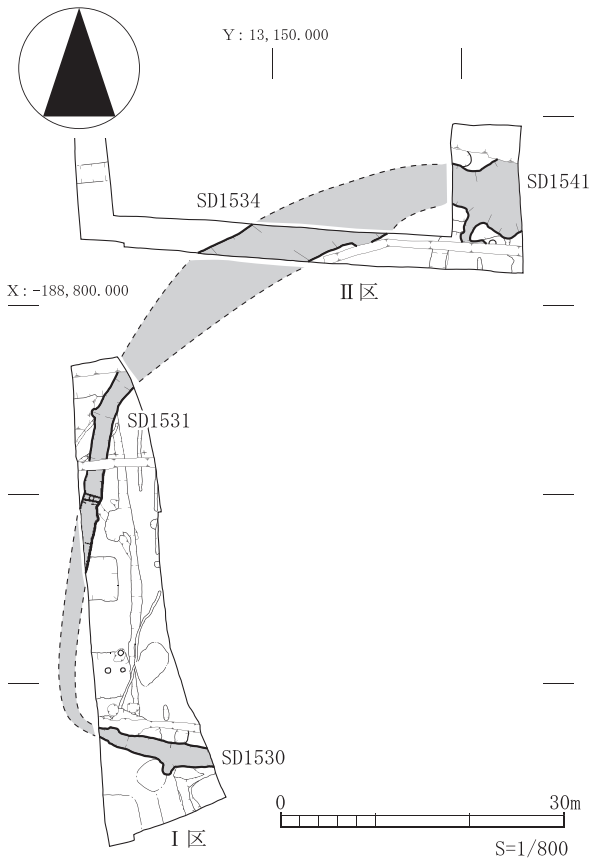
Ｉ区中央部で発見した竪穴住居跡である。残存状況は非常に悪く、一部周溝が露出する箇所がある。ＳＤ1531と重複し、それよりも古い。平面形は方形であり、方向は東辺で測ると北で約２度西に偏している。規模は南北4.7m、東西3.4m以上である。埋土は黒褐色砂質土である。

遺物は南東隅埋土から、須恵器杯（Ⅲ類）が出土している。

ＳＤ1530・1531・1534・1541区画溝跡（第３・６・７・８図）

Ｉ区南端部からⅡ区にかけて発見した区画溝跡である。Ｉ区南端部の東西溝をＳＤ1530、Ｉ区中央から北半の南北溝をＳＤ1531、Ⅱ区中央部の東西溝をＳＤ1534、Ⅱ区東側の東西溝をＳＤ1541とした。区画の規模は、南北がおよそ60m、東西が40m以上と推測される。ＳＩ1529、ＳＤ1532・1533・1537、ＳＸ1539と重複し、それらよりも新しい。方向は、ＳＤ1530が東で約15度南に傾き、ＳＤ1531では北端の屈曲部を境に南側が北で約９度東に、北側が約30度東に偏している。ＳＤ1534ではさらに東側への傾きが大きくなっている。溝の規模は、ＳＤ1530・1531が上幅1.6～２m、ＳＤ1534が約７mである。埋土は、地山ブロックが多く混入する黒褐色粘質土である。

遺物は土師器杯（ＢⅡ類）・甕（Ａ・Ｂ類）、須恵器杯（Ⅱ・Ⅱａ・Ⅱｃ・Ⅲ類）・瓶・甕、須恵系土器高台付杯、丸瓦（ⅡＢ類）、平瓦（ⅡＢ類）が出土している。



第３図　区画溝推定図

ＳＤ1532溝跡（第４・６・７図）

Ｉ区中央部分を南北方向に縦断する溝跡である。ＳＤ1531・1542と重複し、それらよりも古い。方向は、溝の北端中央部と南端中央部を結んだ線で図ると、北で約４度西に偏している。規模は、長さ32m以上、上幅0.5～1.1mである。埋土は、炭化物粒が多く混入する黒褐色砂質土である。

遺物は土師器杯（Ａ類）・甕（Ａ・Ｂ類）、須恵器杯（Ⅱ・Ⅲ類）・蓋・甕、丸瓦（ⅡＢ類）、平瓦（ⅡＢ類）が出土している。

ＳＤ1537溝跡（第６・８図）

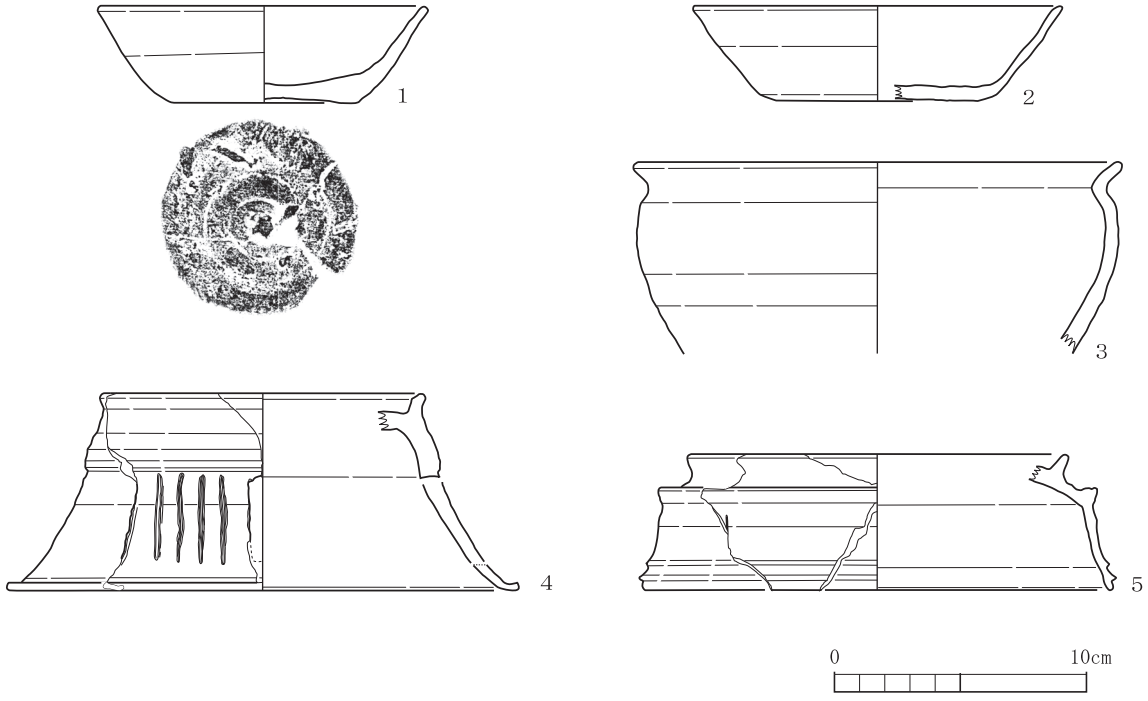
Ⅱ区東端部で発見した、鉤形に屈曲する溝跡である。ＳＤ1541と重複し、それよりも古い。規模は、南北方向の部分で長さ3.5m以上、上幅1.7mである。埋土は褐灰色粘質土であり、中位に灰白色火山灰が自然堆積している。

ＳＸ1539土壙（第６・７図）

Ｉ区南端部で発見した、大規模な落ち込みである。ＳＤ1530と重複し、それよりも古い。平面形は方形もしくは楕円形と推測されるが、詳細は定かでない。規模は南北11m以上、東西９m以上である。埋土は平面観察でみると４層に分けることができる。１層は黒色粘質土、２層は地山ブロックが多く混入する灰黄褐色砂質土、３・４層は黒褐色砂質土であり、４層には焼土や炭化物が多量に混入している。

その他出土遺物（第４図）

今回の調査では、表土掘削及び遺構検出の際に小片ではあるが比較的多くの遺物が出土している（表１）。古代のものに限ってみれば、土師器杯・甕では非ロクロ調整であるＡ類の出土数が多く認められ、須恵器の杯類では底部切り離しがヘラ切りのⅢ類及び切り離し後再調整を施すⅠ・Ⅱ類がほとんどである。灰白色火山灰降下前後に出現すると考えられる須恵系土器は、表土出土のものも含め僅か５点のみである。



単位：cm

番号	種　類	出土遺構 層　位	特　徴 外　面	特　徴 内　面	口　径 残存率	底　径 残存率	器高	写真 図版	登録 番号	備　考
1	須恵器　杯	SI1529 周溝	ロクロナデ 底部：ヘラ切り	ロクロナデ	13.1 12/24	(7.4) 24/24	3,85	—	R1	Ⅲ類
2	須恵器　杯	SD1532 ・1-1	ロクロナデ 底部：(ヘラ切り)→手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	(14.3) 3/24	(8.0) 8/24	3.75	—	R3	Ⅱｂ類
3	土師器　甕	SD1532 ・1-1	ロクロナデ	ロクロナデ	(19.0) 3/24	—	—	—	R5	B類
4	須恵器 円面硯	L－1	硯部径：(12.6)・残存率：2/24、圏足径：(20.3)・残存率：3/24、器高：7.8 体部に縦位の並行線刻、方形の透かし					—	R2	
5	須恵器 円面硯	L－1	硯部径：(15.0)・残存率：1/24、圏足径：(18.4)・残存率：1/24、器高：5.4 体部に縦位の線刻					—	R4	

第４図　出土遺物

Ⅳ　ま　　と　　め

今回の調査では、竪穴住居跡、区画溝跡、土壙などを発見した。溝跡で一部埋土の掘り下げを行った以外は遺構検出段階で止めたことから、遺構出土の遺物は極めて少量である。したがって、ここでは表土や遺構検出時に出土した遺物も加えて、発見した遺構の年代について検討してみたい。

ＳＩ1529では、埋土から須恵器杯が１点出土している。全体のおよそ２／３程度残存しており、底径／口径が0.56、器高／底径が0.29、外傾度が28度である。器壁は比較的厚く、底部の切り離しはヘラ切りである。このような須恵器杯は、本遺跡周辺では延暦９年（780）～24年（805）の年代が与えられている市川橋遺跡ＳＸ1351Ｃ河川出土土器（註１）をはじめ、８世紀後葉～９世紀前半頃に多く認められるものであることから、その頃に年代の一端を求めることができよう。

表１　出土遺物統計

種類	器種	分類	出土地			
			ＳＩ1529	ＳＤ1530	ＳＤ1532	ＬＩ、検出面
土師器	杯	Ａ			1	25
		Ｂ				9
		ＢⅡ		2		1
		ＢⅢ				1
		ＢⅤ				2
		不明			4	
	甕	Ａ		4	14	82
		Ｂ		2		51
		不明		26	17	286
	甑					1
須恵器	杯	Ⅰ				5
		Ⅱ		2	1	6
		Ⅱａ		1		5
		Ⅱｃ		1		
		Ⅲ	1	3	2	38
		Ⅴ				2
		不明		15	2	113
	高台付杯					9
	稜　椀					2
	杯　蓋					12
	短頸壺蓋					2
	瓶					34
	長頸瓶					1
	甕			36	2	244
	円面硯					4
須恵系土器	杯					1
	高台付杯			2		2
瓦	丸瓦	ⅡＢ		2	1	14
		不明				1
	平瓦	ＩＡ				1
		ⅡＢ		1	1	9
	瓦質					2
無釉陶器	甕					1
	擂　鉢					1
施釉陶器	天目茶碗					1
坩　堝						1
砥　石				1		1

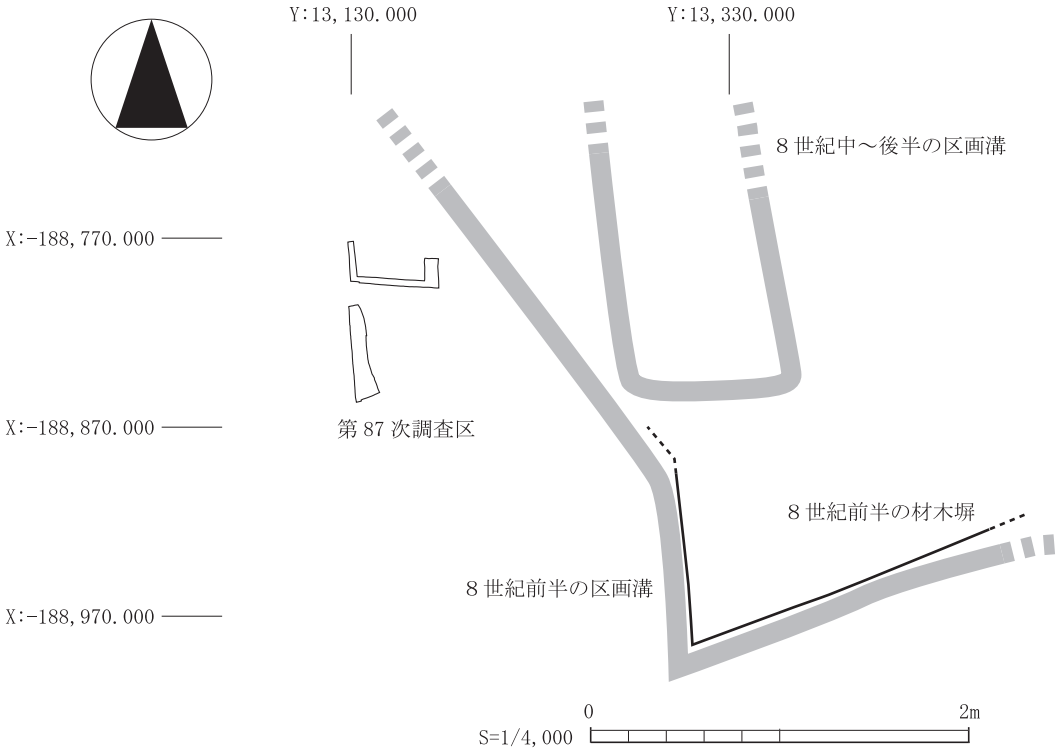
ＳＤ1537は埋土中位に10世紀前葉頃に降下したとされる灰白色火山灰が自然堆積していることから、その頃には埋没が進んでいたものと推測される。

ＳＤ1541はＳＤ1537よりも新しいことから、10世紀前葉以降であることが知れる。中世に下る遺物が認められないことから、およそ古代の範疇に収まるものと考えられる。このことは、同じ区画溝であるＳＤ1530から須恵系土器が出土していることとも矛盾しない。

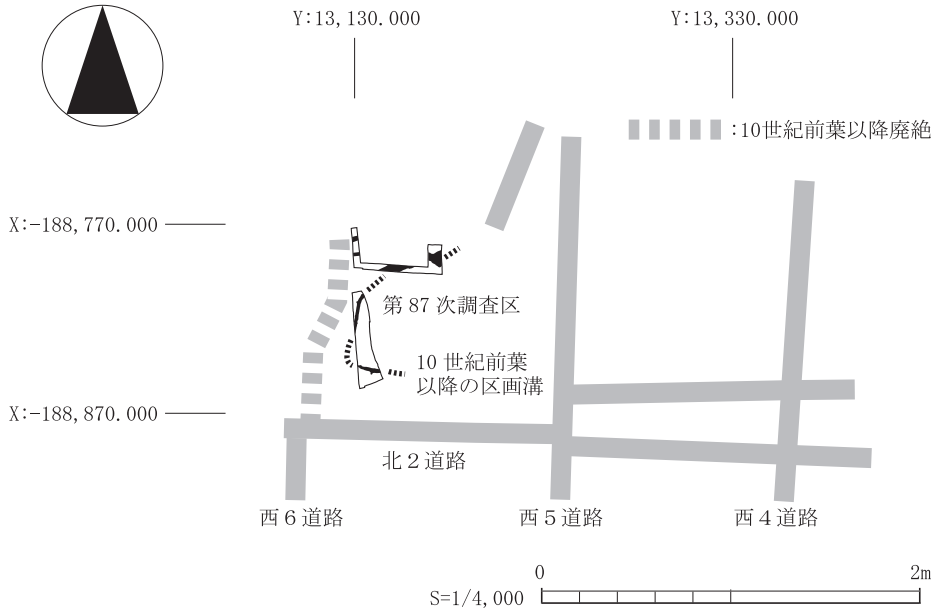
ＳＤ1532からは、土師器杯（Ａ類）・甕（Ａ・Ｂ類)、須恵器杯（Ⅱ・Ⅲ類）・甕が出土している。出土遺物は少ないものの、土師器で分類可能なものはほとんどがＡ類であり、Ｂ類は甕１点を確認したに過ぎない。本遺跡及びその周辺における土師器杯・甕の年代ごとの出土状況についてみると、８世紀中葉頃と考えられる山王遺跡ＳＤ180Ｂ（註２）ではすべてＡ類に限られているが、延暦９年を下限とする市川橋遺跡ＳＸ1351Ａ・Ｂ期やＳＤ1184ではＢ類が僅かに認められるようになる。９世紀になると出土土師器のなかでＡ類が占める割合は極端に減少し、延暦９年を上限とする９世紀中葉頃とされる市川橋遺跡ＳＤ1522（註３）では２割にも満たなくなっている。このことから、ＳＤ1532については８世紀後葉頃のものと考えておきたい。

その他の遺構については、年代を推測できる遺物が出土していないことから不明といわざるを得ない。一方、遺構外の出土遺物を見ると、ほとんどが古代のものに限られる。古墳時代まで遡る遺物は未確認であり、中世の遺物も無釉陶器と天目茶碗の小片が各１点出土するのみである。古代の遺物をみると、①土師器はＡ類の比率が高いこと、②須恵器杯はⅡ・Ⅲ類のものが主体的でⅤ類がほとんど認められないこと、③10世紀以降に主体的となる須恵系土器の出土数が極めて少ないことなどが指摘できる。古代における本調査区の位置をみると、８世紀段階では東側に区画溝を巡らせた大規模な集落が確認されており、９世紀になると多賀城南面に施行された方格地割りのうち北２道路以北の西６道路に東面する地区となる（第５図)。北２道路については、西３道路と西３ａ道路間を除き10世紀前葉以降も維持されるが、北２道路以北の西６道路は10世紀前葉には廃絶していることが確認されている。①～③に見られるような遺物の出土状況は、古代における本地区の土地利用の在り方とも矛盾なく一致するものであることから、今回発見した遺構の年代もおよそこの範疇におさまるものと考えられる。

註１：多賀城市教育委員会『市川橋遺跡－城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書Ⅱ』多賀城市文化財報告書第70集 2003
註２：多賀城市埋蔵文化財調査センター『山王遺跡－第10次発掘調査概要』多賀城市文化財調査報告書第27集 1991
註３：註１と同じ

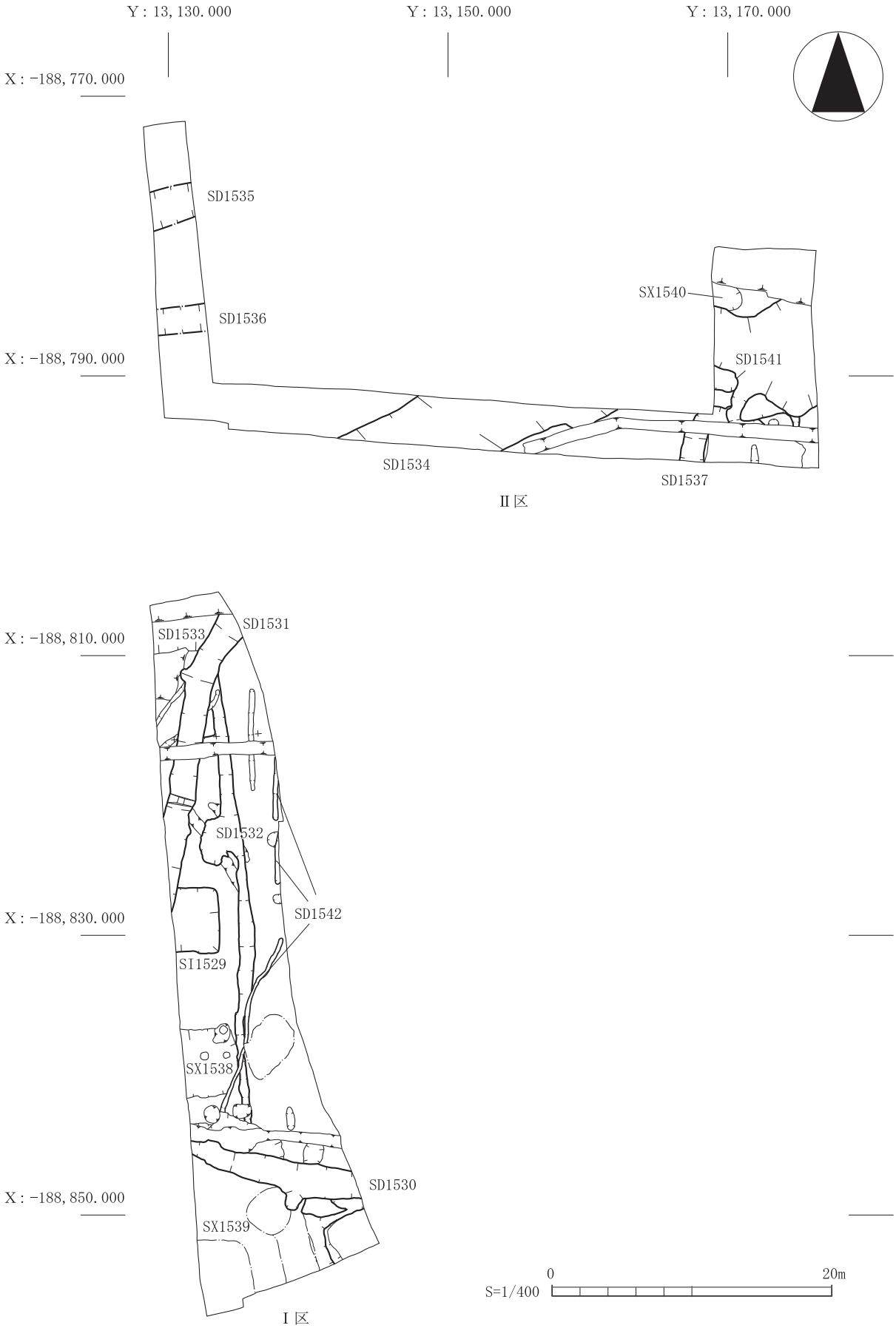


８世紀の区画溝跡との位置関係

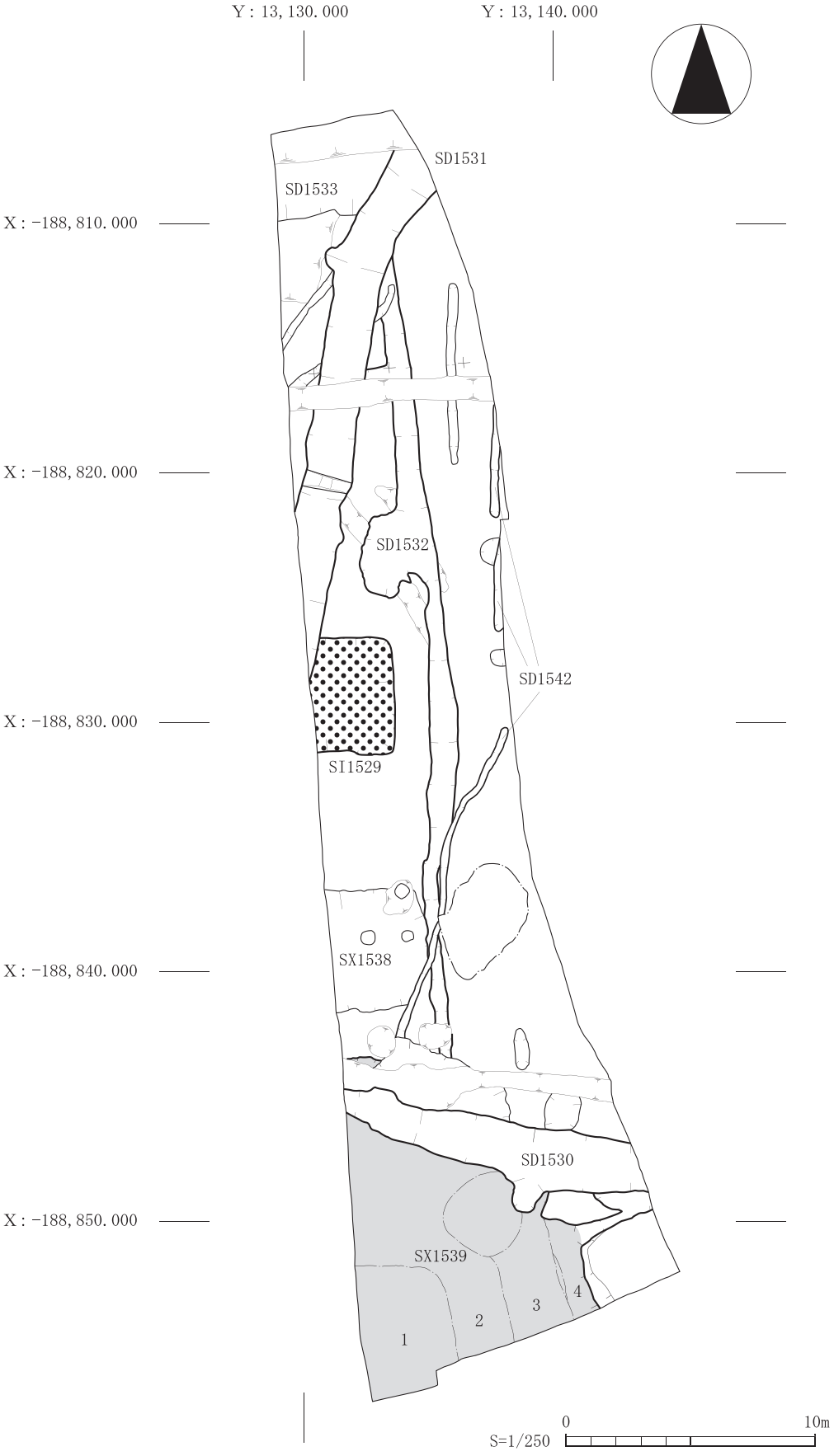


方格地割りとの位置関係

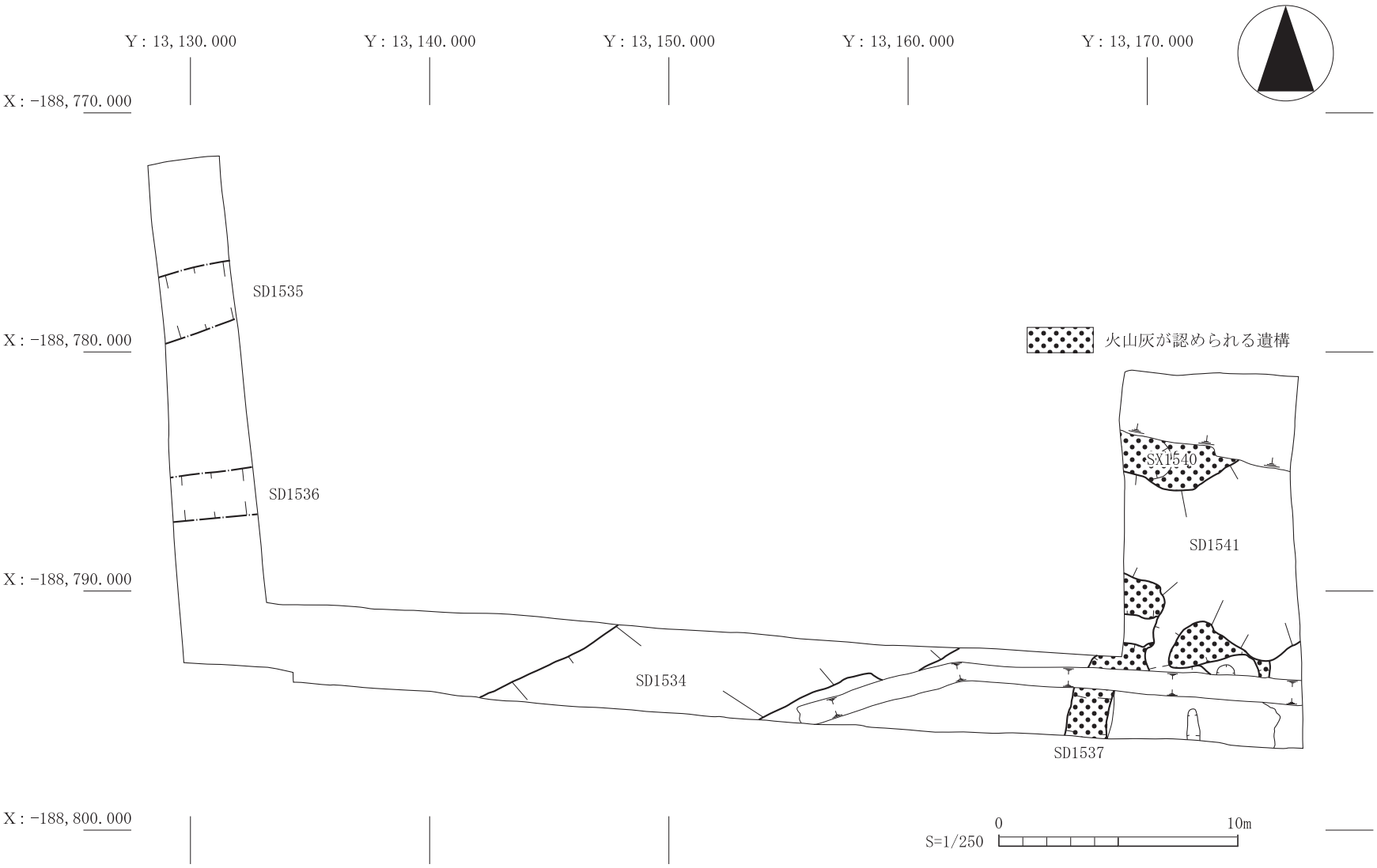
第５図　第87次調査区と周辺の調査成果（８～10世紀）


Y : 13, 130. 000
Y : 13, 150. 000
Y : 13, 170. 000
X : −188, 770. 000
X : −188, 790. 000
X : −188, 810. 000
X : −188, 830. 000
X : −188, 850. 000
SD1535
SD1536
SX1540
SD1541
SD1534
SD1537
Ⅱ区
SD1533
SD1531
SD1532
SD1542
SI1529
SX1538
SD1530
SX1539
Ⅰ区
0
20m
S=1/400

第６図　遺構配置図


Y : 13, 130. 000
Y : 13, 140. 000
X : −188, 810. 000
X : −188, 820. 000
X : −188, 830. 000
X : −188, 840. 000
X : −188, 850. 000
SD1531
SD1533
SD1532
SD1542
SI1529
SX1538
SD1530
SX1539
1
2
3
4
0
10m
S=1/250

第７図　Ⅰ区遺構配置図


Y : 13, 130. 000
Y : 13, 140. 000
Y : 13, 150. 000
Y : 13, 160. 000
Y : 13, 170. 000
X : -188, 770. 000
X : -188, 780. 000
X : -188, 790. 000
X : -188, 800. 000
SD1535
SD1536
SD1534
SD1537
SX1540
SD1541
火山灰が認められる遺構
0
10m
S=1/250

第８図　Ⅱ区遺構配置図

写 真 図 版

Ⅰ区　遺構検出状況（南から撮影）

Ⅰ区　作業風景（北端部）

Ⅱ区　ＳＤ1534検出状況（南から撮影）

Ⅱ区　東端部遺構検出状況（南から撮影）

報　告　書　抄　録

ふ　り　が　な	さんのういせき
書　　名	山王遺跡
副　書　名	第87次発掘調査報告書
シ　リ　ー　ズ　名	多賀城市文化財調査報告書
シ　リ　ー　ズ　番　号	第105集
編　著　者　名	武田健市
編　集　機　関	多賀城市教育委員会
所　在　地	〒985-0873　宮城県多賀城市中央二丁目27番1号　TEL022-368-0134
発　行　年　月　日	西暦2011年3月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
さんのう 山王遺跡 (第87次)	みやぎけんたがじょうし 宮城県多賀城市 なんぐうあざはちまんちない 南宮字八幡地内	042099	18013	38度 17分 33秒	140度 59分 53秒	20101125 ～ 20110120	750㎡	遺構確認

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
さんのう 山王遺跡 (第87次)	集落・都市 ・屋敷	古代	竪穴住居跡、 区画溝跡、土壙	土師器、須恵器、 円面硯、瓦	
要　約	古代の竪穴住居跡、区画溝跡、土壙等発見した。				

多賀城市文化財調査報告書第105集

山　王　遺　跡

－第87次発掘調査報告書－

平成23年３月31日発行

編集　多賀城市埋蔵文化財調査センター
多賀城市中央二丁目27番１号
電　話（０２２）３６８－０１３４

発行　多　賀　城　市　教　育　委　員　会
多賀城市中央二丁目１番１号
電　話（０２２）３６８－１１４１

印刷　株式会社　工　　陽　　社
宮城県塩竈市尾島町８番７号
電　話（０２２）３６５－１１５１

PRINTED WITH SOY INK
この印刷物は大豆インキで印刷しています